

( 続紙 1 )

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	白石 奈津子
論文題目	フィリピン・ミンドロ島の民族関係から見る共同性の諸相 —生活世界の経済取引からみた差異とつながりに着目して—		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文の目的は、フィリピンの東ミンドロ州におけるタガログ／マンヤンと呼ばれる二つの民族の相互関係の事例から、民族間の差異と分断を越境する共同性の在り方を考察することにある。それにより、これまで国家レベルの公共言説空間における問題として語られがちであったフィリピンのエスニシティの議論を、日常の生活世界における問題としてとらえ直し、それが分断とつながりの両義性を持ちながら維持される過程を描き出す。従来の研究において不可視化、もしくは過剰に他者化されてきた少数民族とマジョリティ社会の関係の分断と連続性を有効に議論するために、二つの民族間の関係を、双方の社会の出来事と語りから記述し、経済取引を中心とした具体的コミュニケーションにおけるカテゴリー・イメージの作用に着目して分析している。</p> <p>序論においては、フィリピンにおける社会集団をめぐる従来の議論、特に「山地民／低地民」として語られる集団間関係の議論に見られる偏りの歴史的背景を、アメリカ統治期の制度まで遡って、制度や研究パラダイムの変遷から整理したうえで、フィリピン研究や民族関係にかかわる先行研究に対する本研究の位置づけを明らかにしている。</p> <p>第一章では、ミンドロの歴史をフィリピン国家の歴史を参照しながら整理し、議論の対象とする二つの民族間の境界が形成されてきた社会状況を論じる。そこから、調査地がフロンティア地域として位置づけられてきた歴史と、諸集団の移動の過程で差異が作り出され、民族境界が形成された過程とが、不可分であったことを明らかにしている。</p> <p>第二章では、それぞれの集落に関する全体の社会経済データを整理しつつ、特に両者の結節点として、タガログ社会で見られるフノサンという稲作収穫労働慣行に着目した分析を提示する。また、このフノサンと対照を成すウパハンという安価な賃金労働が、フノサンの代替としてマンヤンの労働力によって担われていることを指摘する。これはタガログ社会におけるマンヤンの搾取ととらえられる反面、マンヤン社会で行った調査データをもとに、それが流動的な労働機会であるからこそマンヤンにとって有用であることを分析している。</p> <p>第三章では、マンヤンとタガログの間のアモータオハン関係という日常の食や住などを共にする場合もあるパトロン－クライアント的な労使関係の事例から、二つの民族集団の間で見いだされる相互関係とその社会文化的意味を検討し、そこに現出するカテゴリー・イメージについて論じる。そうした相互関係は、日常的に人々が無意識に持つ相手に関する「こうあるはず」という予測に切り込んでその変換を迫るものとなる。それは、規範やロジックに基づく積極的な交渉ではなく、相互に共有していない知識や習慣、イメージを</p>			

めぐる無意識の交渉として描かれる。個々人の経験として語られる関係からは、対人コミュニケーションが必然的に持つ偶有性に、カテゴリーという社会的枠組みが重ねられることによって、相互作用の中に期待と裏切り、他者像の形成と反転といった事態が、ネガティブ、ポジティブ双方の性質を伴って、繰り返し生じる様子が描出される。また、その過程において、出来事と経験に基づいて更新されたカテゴリー・イメージが揺らぎを含みつつも共有され、再び人々の相互作用が展開される基盤を形成していくことを明らかにしている。

第四章では、タガログ社会の圃場で、刈り入れ後にマンヤンの人々が行う落穂拾いの実践を検討する。ここではコミュニティの外部者として到来する匿名のマンヤンによる落穂拾いをタガログの人々がなぜ許容するのかという問いから出発し、そうした資源共有の周辺で展開されるカテゴリー・イメージや差異の文脈、越境する共同性や共生のあり方を論じる。人々から提示された説明は必ずしも一貫せずに混線しているようにも見えるが、実際の経験の中では、それらは文脈的連続性と重なりを持っている。そこに見いだされるのは従来議論されてきたモラル・エコノミー的な倫理ではなく、タガログ側の情動を伴う規範、未知なものとの交渉の仕方や共有に関する作法など、両社会における倫理や力をめぐるロジックが重なりあって形成された多層的な理解である。そうした重なりと連続性を持つ様々な解釈は、それぞれにリアリティを保ち、落穂拾いに参与する側、受け入れる側、双方の間の結果論的共生を成り立たせている。

結論では、第一章から四章までの議論を整理し、調査地におけるエスニックな差異をめぐるコミュニケーション過程が、時に関係性や変化に対するクッションとして、時に分断と共同性との間を往来する経験の基盤として、他の文化的な文脈とも連動しながら、エコロジカルなカテゴリー、差異と共生の環境を形成していることを指摘する。

(論文審査の結果の要旨)

少数民族をめぐる民族間関係に関するこれまでの研究は、マクロな視点から国家の民族政策として論じられたり、マジョリティ社会の記述の中に周縁的に登場したり、あるいは少数民族社会の側から民族誌的にとらえるなど、いずれにせよほとんどが一方向的な視点からなされてきた。すなわち少数民族の日常への視点が欠如するか、少数民族の日常に埋没するあまり、マジョリティ社会からの視点が欠如し、一方的な差別や支配を批判する論調や両者の分断的側面を強調しがちであった。このような偏りは、参与観察により日常から描く民族誌的調査の制約上、両側の視点を等しく描くことが容易ではないために生じるものである。

本博士論文は、そのような制約に挑戦し、分断的に描かれがちであったフィリピンのエスニック集団間の関係を、二集団両側から理解するものである。それによりその相互関係を、差異とつながり、分断と共同性の間を往復する多様なアクターを含みこんだ反復的過程として描き直した。具体的には、フィリピン、ミンドロ島の低地に居住するマジョリティであるタガログと、高地に居住するマイノリティであるマンヤンの双方において、合計25か月にわたる長期滞在調査で収集した詳細なデータをもとに、主に生業経済をめぐる相互関係に着目し、日常の具体的な関係における相互作用について論じている。フィリピン全土およびミンドロ島において、歴史的な過程を経て形成されてきた民族カテゴリーと集団の相互関係を、まずは文献を通じて明らかにし、そのうえで農業経済出身の申請者ならではの着眼により、詳細な生業データを検討する。そのうえで卓越したコミュニケーション能力を駆使して両言語で遂行したインフォーマルなインタビューによって得た語りを中心に、生業の経済分析に始まり、ゴフマン的な相互行為・相互関係の描写・分析へと展開し、他者たる異民族間に見いだされる共同性について議論を展開している。本論文の学術的貢献としては、以下の三点があげられる。

第一に、山地マンヤンと低地タガログのそれぞれについての詳細な経済データを提示し、稲作収穫労働慣行（フノサン）がフィリピンの農村経済の研究においてこれまで論じられてきたものから変化している様子を描いている。さらに、異民族が交差する状況においてこのフノサンという労働慣行と、賃金労働（ウパハン）が民族の境界に沿って使い分けられていることを明らかにしている。そして安価な賃金労働は低地社会の共同体規範から排除されたマンヤンに対する一方的な搾取であるとのみ断じるのではなく、流動的に従事することが可能であるが故に、労働する側のマンヤンにとっても望ましいものとして積極的に選択されていると指摘している。これは、両側の詳細な社会経済データを収集することによって初めて可能になった議論である。

第二に、低地タガログ村落において労使関係を結ぶマンヤンとの間に形成される二人称的な親密かつ具体的な相互関係について、両者からの聞き取りによって得た個人的な

体験の語りに基づいて詳細に論じることにより、民族的他者同士の相互関係の動態をとらえて分析している。両者の相互作用においては、相手カテゴリーにイメージを充当しつつ、コミュニケーションのもつ偶有性を通じて、そのイメージが動的に形成・再編され、他者像を確認し反転し更新しながら、それが更なる相互作用を展開する基盤となっていく過程を具体的かつ多様な事例を引きながら分析している。

第三に、コモنز的な空間としてのタガログの圃場で展開する共同性についての分析である。匿名の他者による落穂拾いという形の資源共有について、タガログがなぜこれを拾わせるのか、拾う側のマンヤンにとってなぜそれが可能なのか、双方の言い分を検証する。それにより、モラル・エコノミーや憐みなどの文化的価値だけではない、弱者に帰せられる超自然的な力や他者への恐れなどの情動を含む多層的な文脈において展開する共同性の作法としてこれを分析する。コモنز的な資源共有が成り立つ根源にある差異と、差異を含みつつ可能な共同性を通じて、民族間の相互理解なき共同性の様態を描いている。

これらの点により、これまで一方向的な視点に偏りがちであった民族間関係の議論に対して、民族の境界面を跨いだ現地調査によってはじめてその生活世界から動態を明らかにしている点に、本論文の独創性がある。そのオリジナリティの高い手法を通じて、民族間の差異をめぐる経済行為の規範、モラル、他者像の認知と再編の繰り返しにより、分断と共同性を往来し、様々な変化を受け止める緩衝作用を含む「差異のエコロジー」を形成していることを明らかにしている。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、平成31年1月21日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。